

20150722_銀座農業政策塾/第4期本編第6回_議事録

日時：2015年7月22日（水）19:00-21:00

場所：東京・銀座 銀座会議室

テーマ：①「第4期生チーム発表」

②「今、農的社会デザインの時」

発表者：①第4期生

②蔦谷栄一さん（農林中金総合研究所客員研究員、農的社会デザイン研究所代表、
当塾世話人）

参加者：参加者 10人（発表者を含まない）

（会社経営、会社員、公務員、NPO法人理事長、行政書士、司法書士など）

①チーム発表：

A: 市民農園・体験農園の考察

・成田空港周辺は、反対運動とともに有機農業が推進されてきました。その中には、50年間、有機農業を続けて、その価値に気付いた農家があります。この先、農業を続けていってくれる人にその価値を伝えることが役割であると考えています。

・上記のような問題提起に対して、RIVENDEL（茅ヶ崎市）へ調査に行ってきました。こちらは、会員制の農園とコミュニティ型の市民農園（コミュニティセンター的なもの）を運営されています。イベントへの参加だけでも良く、農業をしると強制している雰囲気はありません。

・調査を踏まえて、「NRT ダーチャ化計画」（仮）を提唱します。有機農業を活用できないかと考えています。NPO 法人にて経営を行います。シェア農家（畑・田んぼをみんなで楽しむもの。休日、テーマパーク的に家族で遊びます）とプチ農家（半農半X的な、あるいは新規就農希望者）の双方に対応できるものとします。

B: コミュニティ農業の担い手

・CSAの普及には何が必要か、そして、その中でも、担い手をどう支援できるかについて問題提起しました。

・あいよ農場（山武市）は、マルシェへの出店、研修生の受入れ、農業体験の受入れ、加工品の製造販売を行っています。宅配や交流会にて、消費者と直接のつながりを持っています。消費者向けに農場のレポートも配布し、どういう人が作っているかを伝えています。

・つちくれーは、山武市にある、三つ豆ファーム、サンバファーム、ナナメファームで構成されています。いずれも30代の農家です。お客様も30代です。イベントでは、お子さんを連れてきます。五右衛門風呂、薪割りを親子で体験します。

・なないろ畑（大和市）は、CSAです。有機農業とともに、前払制を実現しています。消費者による生産と経営への参画によりリスクを分担しています。

・買い手をいかに増やすかが課題と捉えています。まずは、農場を認識してもらうところからです。

・銀座農業政策塾としてアクションが必要と考えています。そこで、「CSA Launter」を提唱します。担い手を買うことで支えていく仕組みです。そのためには、情報発信、レストランで

の交流などのサポートを行います。最終的には、ポータルサイトの構築に持っていきたいです。

C: 都市農村交流

- ・霜里農場（小川町）へ調査に行ってきました。小川町は山に囲まれており、農業がそれほど盛んな地域ではありません。
- ・代表は金子美登さんが務めています。有機農業のカリスマです。天ぷら油のバイオディーゼルの「究極の生活」を実践されています
- ・NPO 法人霜里学校は農業だけでなく、体験活動、地域文化の継承なども行っています。地域に軸足を置いています。
- ・酒米づくりのイベントには、20～30歳代の女性と同年代の男性のカップル、20～30歳代の子ども連れの多さが目立ちました。
- ・都市住民が、月に一度、有機野菜の作り方講座を受けています。農作業のそう快感を体感できています。

D: 産消提携

- ・三富（さんとみ）ライフファームは、所沢市の地元農家、生活クラブ生協、市民によって構成されています。
- ・三富地域では、江戸時代から循環型農業を続けています。雑木林の落ち葉を生活や農業等に利用しています。短冊形の農地が特徴です。
- ・1990年代のダイオキシン問題から、農業と雑木林の保全へ向かいました。
- ・課題は、活動継続のための採算性の確保です。参加費収入だけでは困難です。つくる、食べる価値のある生産物が必要と考えています。また、所沢市の新しいライフスタイル（雑木林都市的ライフスタイル）を提案することも必要と考えています。
- ・今後の展開としては、六次産業化を目指すことです。また、多様な市民参加・つながりも模索し、主催者側のレベルアップをはかります。

② 蔦谷栄一さん：

グループ発表への講評：

- ・産業としての「農業」ではなく、「農」による公益性の発揮を中心にとりまとめられており、大変うれしく感じました。
- ・一つ一つの農場だけの活動には限界があります。農場間の連携により、奥行きが生じます。
- ・「農」の中に占める「文化」のウェイトには大きいものがあります。
- ・買い手（買い支え）から、得意分野での支え手へいかに誘導するか、農でいかにコミュニティづくりを行うかが今後のポイントになるようです。
- ・地域リーダーがあまりいないというところに課題が見えます。有機農業の世界でも、一匹狼できた人も多く、拡がりに欠けます。次の世代を育てていないということもあります。いかに周囲を巻き込み、進めていくか、そして、新しいリーダーを育てていくかです。
- ・農業と林業をつないでいくこともポイントです。地域で一次産業全体をつないでいく必要があるのではないのでしょうか？つまりは、大きな地域循環をつくっていくことです。

- ・地域のストーリーを紡ぎ、情報発信のキーとしていくことも必要です。
- ・連携やネットワークが進んできていることがわかります。可能性が広がってきています。

「今、農的社会デザインの時」:

・なぜ、農的社会と言わなくてはならないのでしょうか？ 戦後、高度経済成長が続く間は、時間の経過とともに明るい未来が展望できるように感じていました。しかし、その前提に「？」がつくようになりました。それが、いまの時代です。生きにくい社会になってきているのではないのでしょうか？ 「管理社会が強化されている」や「人間性が狭められている」といった言葉が時代の象徴となっています。また、「みんな同じであるべき」、「他人と違うのは気まずい」という全体主義を当たり前とする危険な時代ともいえます。しかも、そういった方向にますます社会全体が引っ張られています。経済成長は限界にきています。生きにくい社会となっているのは、経済成長の限界を認めず、あるいはマイナス成長を認められないからではないのでしょうか。経済成長のために海外へ進出し、搾取をしてきました。次は、国内で格差が広がっています。文明化、近代化、資本主義をいかに理解するかが必要になっています。資本主義の第4楽章を模索すべき時です。先行きはなかなか見えてきませんが、資本主義と資本主義以外のものを認めて、バランスをとるべきです。そのバランスの役割を果たす一つは協同です。協同によって形成される外部経済的なものをベースとし、その上に資本主義が成り立っています。そういった土台となる新たな協同をつくるべきです。もう一つは関係性です。人と人、人と自然、自然と自然のそれぞれです。関係性は循環のために必要です。生命原理の尊重にもつながります。こうしたことがビジネスとして成り立つ時代が始まっています。まさに、成熟時代の資本主義といえるでしょう。

・農の持つ社会デザイン力には次の5つがあります。

- ①食料自給能力（食料安全保障。自給部分を拡大していく）
 - ②自立能力（精神的、機能的の双方です。生産と暮らしの一体化）
 - ③コミュニティ形成能力（生産者と消費者による都市農村交流に）
 - ④教育能力（農と食に触れ合うことによる感性の獲得）
 - ⑤生きがい・働きがい実感能力（農と関わることにより経済評価だけではない価値を実感）
- 農の持つ能力を活かしてあらたな社会をつくり、支えていくことです。静かなる革命といえます。いままでは一つの真理があることを前提にしていました。これからは、多様な価値観の中で共通する部分で協調していく時代です。個人、地域からなら変えていくことができます。それが社会を変えていくことにつながります。成熟社会へ向けた次のあり方を模索する時です。

・ブッシュマンは7世代後のことを考えて、決断するとされています。つまり、100年単位で物事を考えています。

・コミュニティ農業の実践は一人一人の行動にかかっています。皆さんは、いまその入り口にたどり着いたのではないのでしょうか？ あらたなステージに立って存分に活躍していただくことを期待しています。

以上